

名古屋の古道・街道

池田 誠一

【9】岩倉街道…枇杷島橋から中小田井へ

1 家康のお墨付きの「市」

1610年名古屋城の工事が開始され、続いて清須からの町の移転が始まりました。城下に人が集まるとともに、食べ物などの生活物資の確保が問題になります。

1614年(1611年とも)、大坂方面に向かう家康が枇杷島を通った時のことです。川岸で騒がしい声がしているので聞くと、農民の持ってきた野菜の値づけでの言い合いでした。そこで家康は、今後ここに「市」を設け、川の渡し守にその裁定者になることを命じたのです。枇杷島は美濃路が通り、野菜の産地である濃尾平野と城下とを結ぶ絶好の立地でした。(図1)そしてここに出来た青物市場—下小田井の市場は、家康お墨付きとして藩の唯一の公認となり、江戸の神田、大坂の天満と並ぶ三大市場の一つに成長しました。

市場に野菜を運ぶ道はいくつかありましたが、北の方からの運搬路として重要な役割を果たしたのが「岩倉街道」です。

2 青物市場への道…岩倉街道

(1) 岩倉街道

岩倉街道は、市場ができてしばらくたった1667年に開かれたといえます。(図2)

しかし、小田井の村は9世紀からあり、戦国時代には小田井城もありました。また、那古野城から小折(江南市)にかけては信長の青春の道でもあり、岩倉への道は部分的にはそれ以前からあったと考えられます。

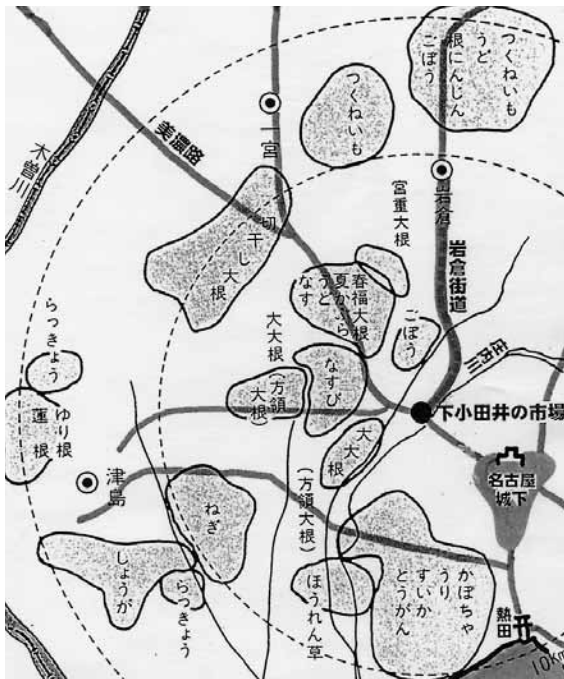


図1 下小田井の市場と岩倉街道



図2 市内の岩倉街道(明治21年)

(このことはまた別の機会に考えてみたいと思います。)

岩倉街道の始点は、美濃路に合流したということから枇杷島橋の西詰です。ところがこの道も終点がはっきりしません。中小田井を通り、北に岩倉まで行きますが、その先が小折か犬山か、終点を示さないという「みち」のあいまいさがあります。岩倉から犬山への道は、犬山街道とか柳街道(柳大道)とも呼ばれています。

明治9年、岩倉街道は三等国道になりました。区間は小田井村から小折村となっています。三等国道は、①東京から各県庁に達するもの、②各府県各鎮台を拘連するもの、と限定されており、小折の位置付けは何だったのでしょか。

(2) 枇杷島橋

岩倉街道が多くの人によって歩かれたのは、市場の開設と並んで当時庄内川で唯一の橋だった枇杷島橋があったことでしょう。

名古屋の西と北は庄内川に囲まれており、中世の鎌倉街道はもう少し西の菅津から中村に渡

っていたとされます。しかし平安時代の終り頃、枇杷島の名の由来とされる故事では、流罪を解かれて京に帰る太政大臣藤原師長を追って地元の娘がこの付近で形見の琵琶を抱いて身を投げたという伝説があります。(図3) 鎌倉街道には枇杷島付近を通る道があったのかもしれませんが。

江戸時代になってここが渡河地点に選ばれたのは、清須から名古屋への最短経路だったことからでしょう。地元には家康が「橋があると便利な所になる」と言ったという文書があり、これを受けて橋が架けられたのではないのでしょうか。砂州を利用して間に島を作りましたが、その中島を挟んでも70間と30間という当時としては長い橋で、荷車の通行が禁止されるほど大切にされました。御岳から名古屋城まで見渡せる景勝の地で、多くの文人にも愛されました。



図3 枇杷島で入水した娘の故事(尾張名所図絵)

3 枇杷島橋から中小田井へ

さて岩倉街道を少し歩いてみましょう。スタートは枇杷島橋です。今の橋は大正の始めに100ほど西に位置が変わり、戦後まで国道の現役だったため昔の面影はありません。なかでも大きく変わった所は、川の中島が撤去されたことです。

この中島は上流の洪水の原因になりました。そのため江戸時代にも、すぐ上流に遊水池を作ったり、洗堰を作り新川を掘って水をカットし



昔の橋の付近から現在の枇杷島橋を

ましたが、上流部の開発に追いつかず、昭和30年に撤去されることになりました。

*

岩倉街道は現在の橋を少し北に行った三差路から始まります。北にすぐ名鉄線を渡り、しばらくは庄内川の右岸堤防を走ります。昔の小田井村は大きな村で、元禄年間に上、中、下の三つに分けられました。今では下は西枇杷島町になり、上、中は名古屋市と合併しています。行く手の川の上流には美濃路の新道になる国道22号とその上に工事中の高速道路が立ち塞がっているように見えます。

国道をくぐりスグの道を左に下り少し行くと公園の中に小田井城址の石碑があります。移設されたもので、城址はそこから西へ400^{メートル}位の所ようです。15世紀の後半尾張の下四郡を治めた織田氏の奉行の一人が作った城で、もう一人の奉行は信長の先祖、勝幡の織田氏です。

そこから北へ200^{メートル}ほど行くと西方寺があります。この寺はもと天台宗でしたが、1232年親鸞上人が念仏取締りで関東から京に帰る途中に



小田井城址の碑



庄内川堤防から中小田井へ

迎えて改宗し渡河山と号しました。小田井城の築城に際して現在地に移転したといひます。

川沿いに戻り、堤防の階段を登ると道の向こうに広い遊水池、庄内緑地公園が広がります。街道は公園に沿って進み、しばらく行くと左に坂を下って中小田井の街並に入ります。

*

中小田井は、青果市場への客が休憩し、生活物資等を買って行く所として賑わったといひます。古い街並が残っているため名古屋市の町並保存地区に指定されています。

街並に入ってすぐ右に五所神社があり、その奥には東雲寺があります。いずれも15世紀以前からある古い社寺です。街道に戻ると続いて願王寺があります。明治時代に長野善光寺から分



親鸞上人が寄ったという西方寺

身をむかえたので善光寺別院ともいわれています。この寺も9世紀からの歴史を持つ寺といわれますが、なんといっても変わった所は別院の外観です。改修に当たって屋根を外し堂を覆う

外形を残したため現代建築風のお寺になりました。門に鳥居がある神仏混交のお寺です。

その先のお米屋さんがある一角は中小田井の街並でも最も雰囲気のある所です。けれどもこの辺りも古い建物が少しずつ消えています。街並の保存は、一部の有志と一般の経済合理性に委ねておいて良いのでしょうか。

中小田井の街を進むと屋根神様を見付けました。西区は屋根



願王寺 右が本堂、左は善光寺別院



中小田井の街並

神様の多い所ですが、古い家が消えるのとおなじに少しずつ減っています。中小田井では名鉄線の向こうにも一つありますが、何れも家が建替えられた後の物です。

名鉄線の手前には最近まで江戸時代からの平手家の建物がありましたが、これも新しくなりました。幸い先ほどの願王寺の一角に移設され、洪水に備えて仏壇を上巻き上げるシステムなどは残りました。街道は名鉄駅の高架の下を真直ぐに北に岩倉へと伸びています。



屋根神様2つ

街道は名鉄高架の下を岩倉へ



4 市場と街道のその後

下小田井の市場は美濃路に沿って展開しました。問屋は38軒もが軒を連ね、明治になって次第に川の東側にも伸びていきました。品物も青果ばかりでなく海産物、炭、綿、茶など多様で、集荷も尾張を含め24の国に達したといえます。

けれども道路上での市場の展開には限界もありました。昭和30年、市場はそこから700mほど東に移転されることになりました。30年栄えた家康お墨付きの市場は、規模の拡大と道路の支障から大きな転機になりました。そして30年後の昭和58年には、同じ理由で豊山町に北部市場として再度移転することになったのです。

枇杷島は明治になって早々と国鉄、名鉄の駅が出来た交通の要衝でしたが、市場の移転とともに急に寂しくなりました。

街道から一気に人が消える時、そこには古い街並が残ります。今日、枇杷島や中小田井に残る街並は、市場の移転と交通のバイパス化によって守られたと言えるのかも知れません。

自転車の 似合う道かな 秋の暮

〈主な参考文献〉

- ①愛知県編「愛知県史・上巻」(1914復刊1990、国書刊行会)
- ②西枇杷島町文化財調査委員会「にしびの文化財⑨・庄内川と枇杷島橋・中島」(1997、西枇杷島町教育委員会)
- ③山田寂雀「西区の歴史」(1983、愛知県郷土資料刊行会)